

沼尻維一郎編輯
西南鎮靜記

三
号

下

二





A 447
6



48-7811

西南鎮靜記三編卷之下

東京 沼尻絰一郎編輯

第六回

岩崎嘉久馬賊の本宮不難と遁る
并 開拓使柴田要蔵最期をる

茲に熊本城舊二の九法華坂うへるる長岡帶刀
八代ふく旧 細川家門 別邸が総督の宮の本宮
祿三万石 開家なり
となり立派に修理せらるるよしありと同縣下
鳥の巢といふの百戸をうりの村用掛久住又



蔵の性質實直み〜村民をよく撫育せー
まゝ信用も亦薄からざり〜が賊徒縣下へ
乱入の後、晝夜村内を奔走〜賊の爲に
使役せらるゝぬやうにと厚くその事を説き
聞かせて生活に苦しみぬのみに自分より救
助るども〜種々心配せ〜が賊徒本陣
を植木に据え、田原坂の戦ひ激烈かり〜こゝ
賊に應じたる縣下の郷士宮崎八郎の黨に

て堀甚三郎といふもののが家族を引きまゝとめ
〜鳥の巢村に潜伏させんと知己の方へ依
托し〜竊ふ久住にかゝりければ先づその者
を営ひ〜頃日我等が賊徒等と黨與して
ならぬといふ事を能く守り〜知らされ〜
ぞ後日ふ至つ〜さる輩とこの村うち小置
きたるが官に知れてい甚ど濟ずとて直に
その家へ赴き〜賊徒の家族と啖り〜い

一日片時も差置れず疾々他所へ立越られ
 よとさも荒らう言つとせむ堀の家族の
 大きな恐怖で植木の陣み逃げ入りつ其三
 郎ふ斯と嘶せば堀の賊等と評議をなす
 村用掛の分際みづ入りざる久住が正義呼
 はり彼奴は必ず官軍ふ心を寄すると覚え
 たり兎ふも角ふも拘引来て取組さんこそ
 宜うめとて多人数久住の家へ向いせ拘

引んとするその折しも村者等へ聞傳へて
 久住の身のうへを心配しともみ植木へ行ん
 とつみを固く制しともめつ獨り拘引てその
 座みつけば賊徒の聲を奮立てヤヨヤ又蔵汝
 の官賊両軍の何れも名義の有りと思ふや
 匿ずにいへと詰り問ふを又蔵の少少の恐
 れず大義名分るんどつみの如何なるとう
 辨へねど斯く戦争の折からち急よ若し

村民そんじんがあやまりて戦地せんちふありむく人々の家うち
族ぞくを村むらふ並ならくときハ是これより強さへぎを醸う成も
不測ふそく害がいと他人たにんふまで被くらせんうとありふが
まゝそれごと某氏そのぢうぢの家族かぞくとやらんの同居どうきよも固く
止とめーのそ唯ただ村内むらうちの安寧あんねい無事ぶじとねぐみの
外ぐわいハ候さうはずと辨解べんかいしたる一言いっごんふ賊徒ぞくどの疑ぎ
念ねんも暗くれたるふや黄昏こそぐれ近く放免はうめん二人
のものを附添つきそして鳥とりの巢す村むらへと送り

いづれを轍ろくろ射のの大川おほがわはまゝ放はなたさしこ
こちへうゑき植木うゑきのむづれは兩人りうにんをばかしく
辞ひなさく歸かへらゝめ七本しちぽん近く来きし折をりてや
暮果くれたま木下こした關かみの前後ぜんごも夫それと見えこり
たぬ背後うしろよりいゝ何者なんものう声こゑともかけず
たゞ一刀いっとうふ又蔵またくらを殺害せつがいし行方ゆくゑも知し
れずありーといふのち何人なんびとの噂うわさするに
堀甚うりかん三郎さんらうハその夕ゆふ植木うゑきの陣ちんを立出たちいて何なん



村用掛り久
住又藏賊徒
堀の為最
期なす

方へりありむきつ深更み帰り来りい
家族を逐いれー私の怨を散ぜん其の
ため彼の一事をばりたるあんと畧
察知する人もありーと鬼も角ふも久
住ふふいてい大義を執るその職を尽せー
そのとりみべー

亦賊徒の為め憂難難せーも曩も同縣
下へ賊徒が乱入せーころ縣の士族の正義

家の賊手み苦ーめられたるい尤も多ーと
波えー中ふ岩寄嘉久馬とふい舊陸軍の
大尉を勤められーグ辞職の後い故郷なる
熊本の戸窪村ふりり専ら商法ふ志ざー
長寄その外へ行通いーこと屢々るりト
グ神風黨暴拳のとき若ー鹿兒島の生年
輩か此拳ふ乗トる事とるさんと密うよ
計るも知とがとき然此の動静をば探らん

ふへ商法上ふく遠近となく廻る序不聞き
糾さんふ塲すものあつとふりいれけれ
を該縣下へも往復し餘事不托して西郷桐
野不面會されしも屢々ありし賊徒縣下
へ乱入せしる實學連と呼ばれたる一團の
士族等ハハゼ山ふ屯集しその他の士族
不方向を誤らせと盡力し賊の拳動を
窺ひし不岩寄氏も餘所なぐら此處へも

事を通ぜしを賊徒ハ疾くも夫と察し不
意ふその家へ乱入し捕へて御馬毛の本營
へ拘留したるその日より汝が曩ふ鹿兒島
み来りし官の内命を受けし探索の爲め
来りしならん包蔵さば白状せよとさるも
荒らうよ詰問ふと岩寄氏の少中強かず
商法の爲め往復するハ鹿兒島ありとい
何處よりとも土地を撰ばんやうもなし

元来拙者ハ商法ふく身とたてんとの目的
なればその用みくこそ往復もすれ官の探
索るんどとい且て覚えのふき事ありと
つゝ賊徒の聞もあらず匿さば隠せんと
せて見せん夫打擲据よとい声の下より
賊ハ棒追取り目鼻も分ぬめつと擲み皮
膚ハ破れて血汐みかれ氣息さへ絶あるを
うりありーまの時肥後の實学連なる神

谷矢柄、澤村大八、安井杏、三人も同トく爰
み捕はれーが各辨解して放還れーと岩崎
一人ハ猶免還さず引出ーてハ同トさまみ
責さういふん事屢ありーが或日薪の上ハ
坐せーめ両手と庭の樹立と縛りく所
嫌はず打擲すれを苦ーと問ゆるその度
み足る荒木の薪の為めは皮肉破れて骨
と露ハす苦惱ハ以前ハ彌益と遁る



山崎嘉久馬賊を拘
引され大難を逢ふ



丈の遁れんりのと種々陳べて居るふど
ふふと思ひつくことありき斯くまで疑ひ深
かゝる拙者が手箱懷中等と悉皆爰へ取
寄せ面前ふかいと調べられよ若しその方
み因ある文書等の有る時へ遁れんとて
及ぶ可らず拙者が語を待よりも證據の
有無を訊さんか何寄りの更みずやと云
ふと賊徒も承引く直ち又家より書類

等と携へ來つて一々是を調ぶる中ふ東
京へ報知すといふ文あるを如何み責め問
へども商法上の事のとありと前後の文意
を辨解するるとき洋紙に書たる横文の一通
中より出たる我賊徒に殊に怪しめど幸ひ
ふいて讀得ぬや横濱在留の商館より品
の相場を問合せし文通ありとて讀聞する
ふ疑念漸く暗れたるさまふて遂に此の日ふ

解放され賊徒二人りきさ昇あ擔かへれて戸窪とくが村むらる
る我われが家いえへ歸かへさしたるその時ときの數す度どの呵あ
嘖げんふ面めん体ていまる或あるひひの傷きずつき腫はれあがりて我
のひと人ひととも見みえざりりが氣き力りきハ更さらふ衰おとろへ
ず實げふ人ひと命いのちハ別べつ物ものあり斯かくる責せ苦くを受うけ
んよりハ飽あまで彼かれを罵ののつつ潔けよく死しせん
かと思おもひひ事ことも屢ありりが條じょう理りも知しらぬ
賊ぞく徒と等らの呵あ嘖げんの答こたふ死しを遂ついんんハ遺い

憾ごん事じるねばと思おもひかへへて忍しの耐たいびーハ我
が幸こう福ふくふありたりとて有ありりハ岩いわ崎さき氏うぢの
實げふ古こ今こんの強かう氣き英えい雄ゆうありけり

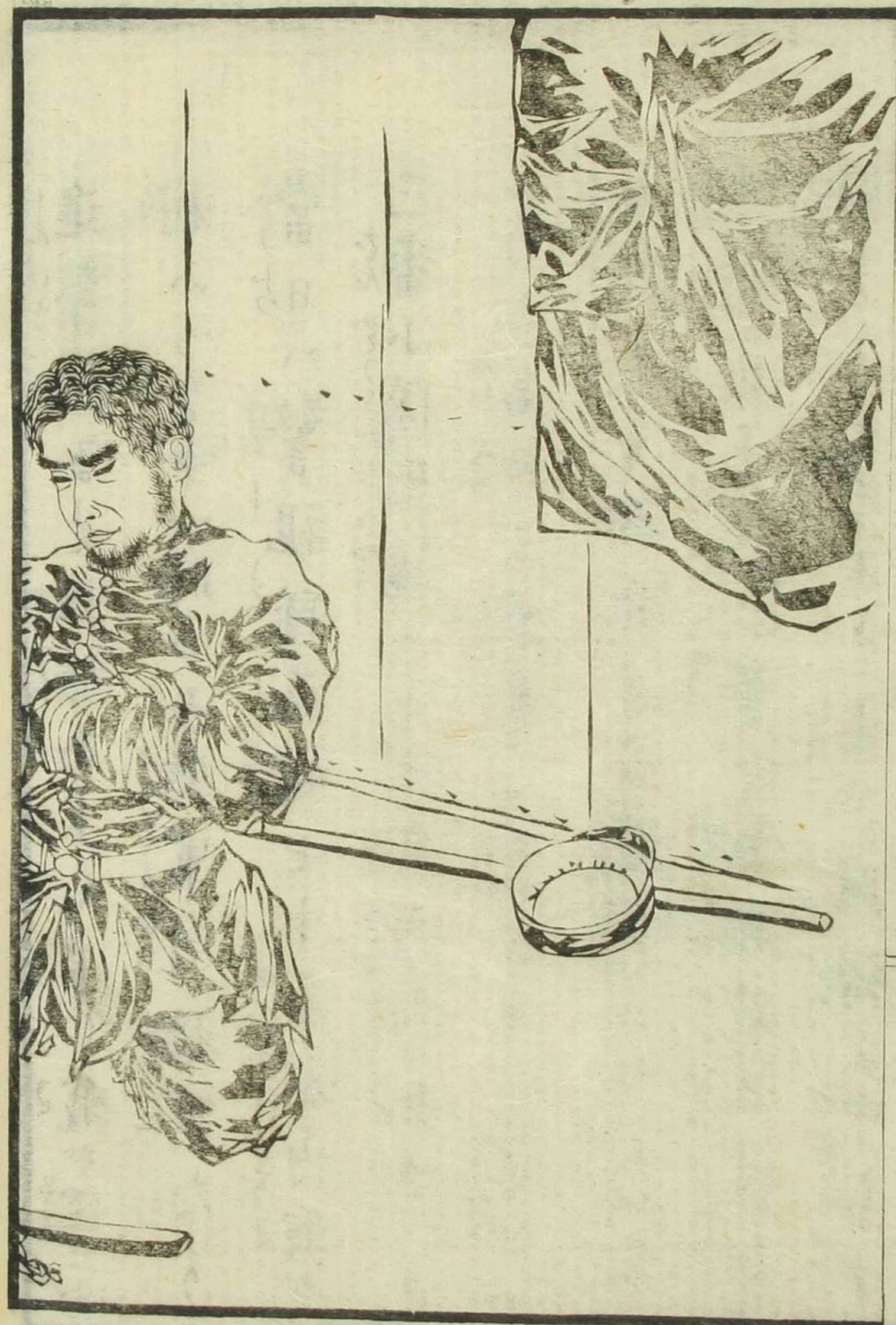
豊ぶん後ご出しゅ張ちやう萩かぎ原げん大だい警けい言げん部ぶ附ぶ小せう隊たい長ちやう中ちゆう
澤ざい直ちく亮りやうより来き翰くわん中ちゆう略りやくす

豊ぶん後ご國こく臼うす杵すき城じやう下か大だい分ぶん縣けん着ちやう後ご追お々ひ進しん
軍ぐんふ及および舊きゆう岡かう城じやう下か小せう賊ぞく兵へい數すう千せん人にん屯とん集しゆう

せるより（中畧）五月ご二十に七しち日にち諸しよ道どうの官くわん

軍一時に進撃の約束にて警視隊を
大分口より熊本鎮臺兵へ玉来口よ
り我が三番小隊へ先鋒にて勇進せ
しところ賊兵鏡山と申ところより左右
の山上小數ヶ所の臺場と設けり我軍
少しも恐れず益々進んぬ午前七時
ごろより開戦す賊兵次第に増加し益
々激戦ふ及び我が隊も聊々屈せず

進撃すると地形ありく我が軍不
利ふつき十一時ごろ惣軍引揚げたり
當日の警視隊死傷七十名程内我が
三番小隊死傷二十九名内即死する
もの六名中軍曹一名あり六番小隊
分隊長も即死せり直亮その日の最
早戦死と決心罷り在候得共運命
強きところふと未だ賊弾中らず



柴田要蔵
悴の從軍
と歎願す

同二十九日再度諸軍進撃手の筈にて
午前四時より開戦し相あり午後八時
ころに至り舊岡城下竹田町所々放
火して賊兵散々退去す諸軍一時城下
み繰込となり夫より進撃して宇田枝
と申ところに至り賊ハ三重市に屯集
せるより一つき再進撃の軍議相決し
諸軍の向ふところと定め進軍せり賊

ハ直ちに戦ひせむと退き舊臼杵城
下み屯集せり賊兵臼杵へ繰込込
節ハ當城下士族八百名計り東京巡查
二百人城下入口所々みく戦争み及べ
ども何分賊の勢ハ強くして官軍數
々退去せり依て賊兵いよ臼杵を我
有と一諸道の要地み臺場を設け守
備を嚴重みせり依て諸道の官軍ハ

臼杵の賊兵を攻撃せんと各々向ふところを定め本月八日拂曉より臼杵城下近辺へ押寄せ所々みて開戦せり同九日午前八時より開戦官軍大勝利賊は散々走退て城下の要地を守る九日より晝夜連戦して十日午前八時ごろ賊兵城下へ放火一人も不残佐伯路へ退去す八日より十日までの

戦争ふく官軍の死傷六七十名あり賊兵數知れず所々賊の死体と見る當城下進撃の實は愉快の戦争あり我が三番小隊へ當城下警備の爲め未だ當地へ滞在せり賊は只今佐伯より一里計りのところへ屯集せるより先づ當縣着後今日迄の御報知申上候

六月十五日

斯て六月二十九日、川路少将の一手
の両道より進撃し、鹿兒島城に連絡と
通たります。西南の事件起りより
北海道なる屯田兵も曩日ふ出張たり
けしむその豫備兵の招募に應じて數多
出たるその中、開拓使の等外二等なる
柴田要蔵、年ねん齡れいこそ四十を超たれ、福山
の警察令署にありて常々職務に怠らね

る。招募の事を早くも聞こそ我が子貞太と
諸共、從軍願ひと出し、ところふもとより年
齡合格のもの、採用せらるゝより要蔵
の歎息なり。我が倅こそ若年、且つ強
壯の性質なれ、願ひの如どの叶ひもせぬ
我れ、初老の坂をも越えて持病さへす
とき、よあゝねむ許されざらん、必定なれど
かゝその場は臨し、とて拙々しくも働かれ



西軍赤松
谷小大激
戦及



ず却つゝ味方の厄介ともろろ何れど
遺憾らん去り迎此の度の從軍も洩れ
ての生て居る甲斐もろき涙るぐろ思案
を定めせめて貞太が餞別は我一命を捨
たなう志とも励まう一層勇氣も添ひ
ぬべしと分署の内の一室に入り小刀とて
我が咽喉ふグサと突立て絶命んとする
有様と各々見認て打撃き柳田小書記官

ふ斯と通し貞太と始り親族も其趣と報
知れば柳田氏も出張せられ貞太も来つ介抱
さるふ柳田氏へ負傷ふ向ひ狂氣せし柴田
氏何と斯る所業へせしぞとろろ語ふ
眼を開き衆しとせし從軍もよる年浪
ふ立交られ御國恩とも報られねば此世
に有て益るき身のう切て悴願の通り戦
地の御用を勤むるやう偏不願ひ奉るこれ

貞太よ父の最期も賊徒の為ぞ讐言を彼の地
 お討んと思ふ花々しく戦ひて奴々後れを
 取るゝみられ我も陰身お附添ふて護らん
 程おとつ声もそやうれぐの苦痛のありさ
 ま柳田氏も感涙とそろお浮べて言はう
 やう悴貞太の從軍の御身が誠心貫いて
 必ず御許可疑ひるゝ又是までも職務の上
 お勉勵したる廉と以て十等属お任せらる

るといと懇ろお告諭さるをも柴田要蔵の
 難有涙おくれ語はるくて朱は染むてを打
 合せて拜するを惜しや此の世の名残りお
 て遂お果散るゝうせたりけり

既お西南の逆將一西郷隆盛が人吉を落てあり
 其所在を判然と知らざりしが早良といふ地の其
 續き隈山といふ殊の外高山といふ山脈の日向大隅
 近お且嶮岨なるこつみそくりなき山ありが此

地ふ西郷大将の指籠りたるより其後の進軍も容易より難き嶮岨なれは官軍の工兵隊を以て先其道路を開かんとして多人数高山の麓に掘込又七月一日午前十時頃延岡本街道赤松谷の左翼工コ山の賊壘を官軍攻撃せし小頂上より烈く連發するに官兵の事ともせず勇を進んで奮撃突戦し遂に賊壘を抜き孰れも比類なく西軍の耳目を驚かしす程まで味方への之が為は一層銳氣を増し

進撃し賊潰走して銃器を捨て官軍賊の臺場二ヶ所を攻落す同二日午前四時楠原口中村口尾楠口の三道より進撃し楠原口の頗る激戦の処十二時高千穂第一等要害の賊壘數十ヶ所を悉く乗取りけるを以て是より日向吉田の戦ひで逆將淵邊高照討死續て飯野小林と相良池上の降伏ありつる詎に四編に至りて知りぬり

西南鎮靜記三編卷之下終

西田金書言

明治十年八月三十日 御届
全 十一年一月十日 出版

第壹大區十四小區

東京堀江町二丁目九番地

櫻井浪次郎同居

茨城縣平民

編輯兼
出版人

沼尻絳一郎

定價廿二錢五厘

萬笈閣製本各地專賣書籍館

江島喜兵衛

東

京

北島茂兵衛	稻田佐兵衛	山中兵衛	小林新兵衛	丸家善七	村上勘兵衛	中村佐助	牧野吉兵衛	柳川梅次郎	水野慶次郎
-------	-------	------	-------	------	-------	------	-------	-------	-------

東

京

林萬次郎	石川治兵衛	荒川藤兵衛	太田金右衛門	北澤伊八	朝倉久兵衛	青山清吉	鈴木忠藏	山中孝之助	山中北郎
------	-------	-------	--------	------	-------	------	------	-------	------

東	同	同	西	同	大	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	伊勢四日市	尾張名古屋	同	同	同	同	三河舉母	岡崎	新城	豐橋	
京山田藤	東京生龜次	岡田文	大谷仁兵衛	永田調兵衛	藤井孫兵衛	柳原喜兵衛	前川善兵衛	前川源七郎	吉岡平助	松村九兵衛	岡田茂兵衛	梅原龜七郎	中島德兵衛	赤志忠七郎	伊藤善太郎	加藤長平	片野東四郎	栗田東平	矢田藤兵衛	鬼頭平兵衛	鬼頭松次郎	三輪伊次郎	三輪文次郎	菅江笑三郎	伊藤文吉	葛家英吉	高須又八羽前上山
助東	郎甲斐山梨	助伊豆三島	衛武藏深谷	衛同	衛同	衛下總佐原	衛同	郎同	助同	衛常陸長竿	衛美濃大垣	七同	衛同	上同	郎同	平同	郎信濃長野	平同上田	衛上野桐生	衛下野宇都宮	郎同	六岩代若松	郎同	三陸前仙臺	吉同	吉羽後秋田	八羽前上山
京古川半	内藤傳右衛門	關谷利右衛門	酒井省吾	小野脩三	長島為一郎	朝野利兵衛	茂木林藏	榎本次郎右衛門	太田儀助	菊池儀助	岡安慶助	半野利兵衛	久保田鍊藏	水谷善七	山岸彌左衛門	玉井忠造	西澤喜太郎	伊藤甲造	竹内藤吉	崎尾新右衛門	田野邊忠兵衛	森萬助	齊藤彦太郎	菅原安兵衛	白木安古衛門	本間金之助	高橋庄三郎

同 伊勢四日市
同 山田
尾張名古屋
同
同
同
同
同
三河舉母
同 岡崎
同 新城
同 豐橋

赤志忠
伊藤善太
加藤長
片野東四
栗田東
矢田藤兵
鬼頭平兵
鬼頭松次
三輪伊
三輪文次
菅江笑
伊藤文
薦家英
高須又

上同	郎同	平同	郎信濃長野	平同	衛上野桐生	衛下野宇都宮	郎同	大岩代若松	郎同	三陸前仙臺	吉同	吉羽後秋田	八羽前上山
岐阜		望松		上田					福島				

高橋	本間	白木	菅原	齊藤	森	田野邊	崎尾	竹内	伊藤	西澤	玉井	山岸	水谷
庄三郎	金之助	安古衛門	安兵衛	彦太郎	萬助	忠兵衛	新右衛門	藤吉	甲造	喜太郎	忠造	彌左衛門	谷善七

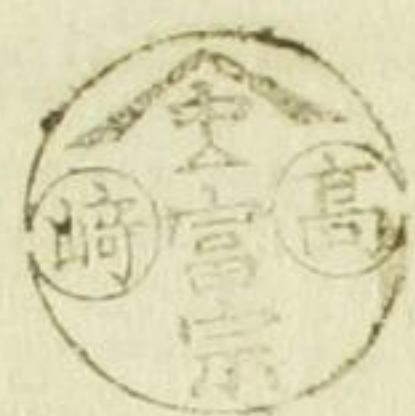
東同同西同同大同大

山田藤次
東生龜
岡田文
大谷仁兵
永田調兵
藤井孫兵
柳原喜兵
前川善兵
前川源七
吉岡平
松村九兵
岡田茂兵
梅原龜
中島德兵

衛	上	衛	衛	助	郎	助	衛	衛	衛	衛	衛	助	郎	助
同	同	美濃大垣	常陸長井	同	同	同	同	同	同	同	同	伊豆三島	甲斐山梨	東
				台市場	布佐	野田	下総佐原	鴻巣						京

吉川半七
内藤傳右衛門
関谷利右衛門
酒井省吾
小野脩三
長島爲一郎
朝野利兵衛
茂木林藏
榎木次郎右衛門
太田儀助
岡安慶助
平野利兵衛
久保田鎮藏

同	同	同	同	駿	同	同	同	同	同	同	同	同	同	遠
	沼		靜	河	掛	二	見							江
	津		岡	藤	川	俣	附							濱
小	吉	廣	佐	淺	大	天	古	白	一	山	齊	松	落	松
松	成	瀨	藤	井	塚	井	澤	木		下	藤	塚	合	合
浦	壽	市	俊	安	好	金	良	健	貫	仁	太	聚	清	清
	三			兵	五			二		兵	兵			
吉	郎	藏	平	衛	郎	藏	作	郎	社	衛	衛	人	七	同
周	同	同	同	越	同	同	同	同	同	越	同	同	同	同
防	四	葛		後	高					中			山	形
山	谷	塚		良	岡					富				
口	濱			岡						山				
阿	佐	弦	松	中	車	川	大	中	守	土	中	平	市	村
部	藤	卷	田	村		上	橋	川	川	井	川	田	五	郎
準	友	七	周	作	平		甚	甚	吉	字	久	彌	郎	兵
		十			次				兵	三		平	衛	衛
輔	吉	郎	平	平	郎	亭	吉	藏	衛	郎	助	治		





010190508191

